

森本元子 編
田村柳壹

由裏名所百首

古典文庫

森本元子
田村柳壹
編

内裏名所百首

古典
文庫

昭和六十三年二月二十日印刷發行

非売品

編者

森本元子
田村柳壹

発行者

吉田幸一

印刷者
白橋印刷所

首百所名裏内

発行所

114

東京都北区西ヶ原
三ノ三四ノ一二

古典文庫

電話(九一〇)二七一七
振替口座東京九・一四五九七番

目次

凡例	三
内裏名所百首 建保三年十月廿四日	七
校異	一三五
解説 説 〽建保三年内裏名所百首考〽	二〇二
和歌初句索引	三三
歌題索引	三六一

凡 例

まず、底本の書誌ならびに翻刻方針を述べる。

底本は縦二六・七糎×横二一・一糎の袋綴一冊本。本文料紙は楮紙、表紙は濃紺色無地の楮紙、見返しは金切箔・砂子散らし。外題なく、内題は「名所百首内裏」。墨付五〇丁、一面一四行。「残花書屋」の蔵書印あり。文亀三年橋本公夏書写本。編者（森本元子）所蔵本である。

本文は第三類本（女流後置本）に属するが、該本は第三類本の伝本中にとどまらず、現在までに管見に入った各類伝本（二七本）を通じての最古写本ということになる。しかしながら、他の伝本と同様に、本文には若干の欠点も存する。すなわち、底本には213（大淀浦）・431（小倉山、ただし、428が重出しており、当該題の詠は一二首）・712（鏡山）の三首が欠脱しており、第三類本に共通してみられる歌序の誤りが存するほか、該本固有の歌序の異同もみられる。

翻刻の方針の概要は次の通りである。

(1) 翻刻に際しては底本に忠実であるように努め、漢字・仮名の別、仮名遣い、送り仮名などすべて底本のままとした。

(2) 用字は原則として通行の新字体によるが、次に掲げる漢字に限り、底本のままとした。

嶋・龍・鴈・磯・鰯・鴈・蘆・峯

(3) 底本に存する見せ消ち・重ね書き・傍書・校異の類は、底本の原状のままに示した。

(4) 底本には虫損が存するが、校異に用いた同系諸本を参照しつつ判読した場合、その文字を□に入れて示した。

(5) 底本に存する歌序の誤りは原状のままに翻刻したが、正しい歌序を再現できるように、歌番号は正しい歌序の一連番号とした。

(6) 巻末に第三類本の主要伝本であるノートルダム清心女子大学附属図書館蔵黒川文庫本・長谷寺蔵豊山文庫本・水府明德会彰考館蔵本の三本との校異を掲出した。

(7) 参考までに、底本に欠脱している三首を同系の伝本である水府明德会彰考館蔵本によって掲出しておく。

- 213 大よとのうらめしとなき曙も袖をそほさぬはるの月かけ (大淀浦)
431 てりまさる月はおくらの名をすてゝ紅葉をわくる秋の山のは (小倉山)
712 つもるとも誰かきてみむかゝみ山けさかきくもる峯の白雪 (鏡山)

巻末に、解説に代えて「建保三年内裏名所百首考」を附載した。また、和歌初句索引・歌題索引を添えて検索の便を図った。

内裏名所百首

建保三年十月廿四日

名所百首

内裏

建保三年十月廿四日

題

春二十首

音羽河

玉嶋河

高砂

春日野

三輪山

葛木山

手向山

伊勢海

志賀浦

三嶋江

塩竈浦

宇津山

葦屋里

吹上浜

由良崎

忍山

水無瀬河

大淀浦

田籠浦

末松山

夏十首

大井河

信太杜

猪名野

御裳濯河

伊香保沼

天香久山

大江山 難波江 美豆御牧 松浦山

秋二十首

泊瀬山 龍田山 陂磨浦 宮城野 水荃岡 小倉山

宇治河 常槃杜 三室山 高円野 伊駒山 生田池

浄見関 武蔵野 伊吹山 佐良科里 白河関 野嶋崎

明石浦 阿武隈河

冬十首

清滝河 小塩山 住吉浦 片野 田蓑嶋 有乳山

浮嶋原 安達原 因播山 鏡山

恋二十首

伏見里 霞浦 石瀬杜 筑波山 袖浦 益田池

高師浜 阿波手杜 志賀須香渡 浜名橋 磯間浦 守山

佐野舟橋 安積沼 松嶋 緒断橋 三熊野浦 鳴海浦

二見浦 名取河

雜二十首

吉野河 鈴鹿河 不尽山 還山 海橋立 飛鳥河

鳥羽 辰市 吹飲浦^(ママ) 布引滝 長柄橋 玉河里

生浦 佐夜中山 嵯峨野 角田河 飭磨市 若浦

会坂関 三津浜

作者十二人

女房順徳院御隱名

僧正行意

参議藤原定家

從三位藤原家衡

宮内卿藤原家隆

左近中将藤原忠定

前丹波守藤原知家

丹後守藤原範宗

散位藤原行能

左衛門小尉藤原康光

俊成卿女

兵衛内侍隆信女

春二十首

音羽河 山城

女房

1 をとは川山にや春のこえぬらむせき入ておとす雪の下水

僧正行意

2 をとは川せき入し浪のうち出て春きにけりとみえもするかな

参議藤原定家

3 をとは河雪けのなみも岩こえて関のこなたに春はきにけり

従三位藤原家衡

4 音羽川せきいるゝ水も氷とけて春やをそきとうち出るなみ

宮内卿藤原家隆

5 あふさかの関のこなたに音羽川をとにきゝつゝ春はきにけり

左近中将藤原忠定

6 春きぬといはせの浪のをとは川氷よりいつる山風そふく

前丹波守藤原知家

7 つらゝゐし岩まの浪のをとは川けさふく風に春やたつらん

丹後守藤原範宗

8 岩まよりうち出る波のをとは川こほりの下に春やしのひし

散位藤原行能

9 春のたつ岩まの波のをとは川ふかきあはれのみえもするかな

左衛門小尉藤原康光

10 ふりつみし雪けの水の音羽川いかなる春の色にいつらん